

令和4年度 第1回 西宮市立こども未来センター運営審議会 議事録

令和4年7月26日(火) 10時00分～11時55分

開催場所： こども未来センター4階 会議室

または オンライン参加

出席者：【委員】 <来所> 新澤 伸子、本田 洋子、田村 三佳子、古川 勝、上野 武利、
河崎 満

<オンライン> 金高 玲子

【事務局】 <来所> こども未来部長 大神

こども未来部参事兼地域・学校支援課係長 繁田

こども未来部発達支援課長 地行、同係長 吉田、藤長

こども未来部診療事業課長 谷口、同係長 坂本

こども未来部地域・学校支援課長 安積、同係長 齊藤

<オンライン> こども支援局長 伊藤、学校教育部長 杉田

次 第： 議事 こども未来センター運営審議会提言案について

開 会

○ 開会

配布資料の確認、進行方法（オンライン併用）の確認

○ 議事

・傍聴希望者無し

【会長】

本日の次第に従い「議事1 こども未来センター運営審議会提言案について」に関して、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

運営審議会において、こども未来センターが開設から5年を迎えることから見直しの時期にさしかかっているのではないかとの意見があり、昨年度、今後のあり方について協議するためのワーキンググループを設置し、ワーキンググループ・審議会の意見を踏まえて、センター職員による自己評価をはじめ、市民・関係機関向けアンケートを実施した。

4回のワーキングと運営審議会を経て、こども未来センターの今後のあり方についての提言案をまとめる予定だったが、今年3月に開催したワーキンググループ以降、事務局職員の人事異動等もあり、4月

の審議会、6月のワーキンググループが開催できなかった。

今回提示した提言案は、センター内の各部門が自己評価やアンケート結果から見えてきた現状と課題、その対応策について協議・検討し、事務局サイドでまとめたものであり、ワーキンググループの意見が反映されたものではない。

事務局としては、今回の運営審議会で出された意見を踏まえて提言案をまとめたいと考えている。

《以後、資料に基づき、こども未来センター運営審議会提言案について説明。》

【会長】

本日、事務局資料として「発達障害（神経発達症）についてのアンケート結果」と「こども未来センター診療所と地域医療機関との連携状況について」が配布されている。

事務局の提言案の「はじめに」の最後の段落で、「発達障害への一般の認知が進み、また医療的ケア児への対応が法制化されるなど、需要が大きくなっている現状に鑑みると、センターで担える範囲には限界があり、市全体としてうまく対応するためにはセンターがどのような役割を果たしたらよいかという視点が有効と考えます。一例を挙げると医療を担うセンター診療所は診療待機期間の短縮に向けて、医師などの専門職員の増員を図るなどして対応してきましたが、発達障害の認知が進んだことや全国的な専門医の不足等により、なかなか短縮には至っていませんでした。そこで地域の医療機関と連携した体制を組むことにより、役割分担を図っています。」と記載されているが、診療体制について取り組んでこられたことの方角性について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

《資料に基づき、発達障害（神経発達症）についてのアンケート結果、及びこども未来センター診療所と地域医療機関との連携状況について説明。》

【会長】

それでは、事務局の提言案について、まず全体的なところでご意見いただいて、論点を絞ってその後、そのことについて詰めて話をしていきたいと思う。委員の皆様から、ご自由に発言をお願いします。

【委員】

事業ごとのアンケートの結果について、課題点や改善点をまとめられているが、この場の議論の中で、センターの機能のどこを評価していかなければならないかということが見えにくい。

今回アンケートをとる時に、他機関への支援の部分で、これまで学校園への支援であったり、セラピストの派遣であったり、受けている側がアウトリーチというものがどういう事業なのかわからないまま、アウトリーチという言葉を使っていると思う。

ここで触れているアウトリーチというのは、基本的には派遣事業であって、近年言われているアウトリーチは、現場がどのような状況にあるかなどの課題把握の視点が必要であり、要請があったから行くのではなくて、体制の問題があると思うが、定期的な巡回をすとか。いろいろな面で発達障害の理解が広が

ってきて、利用者や親御さんも意識などが変わってきている。いろいろな事業で感じているのは、サービスを利用する際、両親が働いていて、昔のようにフォローアップとして予定を合わせてきてくださいというのは違う、というようなところ。事業の要望に挙がっているように、今、現場でどんなニーズがあるかを未来センターが積極的に把握していく、という視点で言ったら、アウトリーチというものを基本的にまとめて、その機能を評価することを知らせてもらえるといいなという感じで意見を出したと思う。

保育所等訪問事業の点でも、わかば園の関係者に限定していたのを広げるのであれば、アウトリーチになっていくと思うが、限定されているのであれば、それは訪問事業だと思う。わかば園児さんのフォローをするという部分で言うと、全体的な改善点とは、もう1つ上位にどういう機能を高めていくのか、もしそれがアウトリーチだということであれば、そのことを評価できればと思う。

【会長】

論点として、このアウトリーチ事業が外から見たらわかりにくいので、もっと周知すればいいということではなくて、アウトリーチのあり方とか、整理の仕方とか、そういうことからしていかないと、現状のまま周知しても、それでは改善にならないのではないかと思います。

論点として、アウトリーチのことをご指摘いただいたので、詰めて話をしていきたい。

【委員】

この提言案はワーキングチームを含めたまとめと認識していた。

まず1点目に、大枠の問題として、こういったまとめには、最低限必要な手順というのがあり、さらに有効な手立てというのがあると思う。最後の分析のところは完全に抜け落ちた、という点では、今日の会議で終われないという大前提の中での意見とさせてもらう。

有効な手立てとして言えば、例えば、全体の回答の中で、児童通所支援の回答が10%と低い。今後児童福祉法の改正があって、児童発達支援センターが核となって、各事業を支援・育成していくという点では、このアンケート結果をどう生かしていくかということが今後の未来センターの事業のやりやすさにつながってくるので、今後またこういうアンケートを見直しと違うレベルでとっていいのではと思っている。

アウトリーチという言葉の使い方について、以前から指摘してきたが、一向に変わる様子はなかった。専門家が入って児童の援助の仕方を考えるというのは、コンサルテーションという言い方が主流となっている。押しかけて行く方向にもっていくのであれば、アウトリーチという名称でもいいと思っている。

未来センターのネットワーク機能について、西宮の場合は本当に1カ所でもいいのか。非常に多くの利用者があるならば、もう1カ所、2カ所みたいな話が本来的だが、その議論はここではない。未来センターがこの状態でやるとしたらネットワークを強化しないと追いつかないと思うので、機能の見直しという点では、ネットワークの強化や構築についての方策に導かれる意見がないということが非常に残念なところ。

唯一、クリニックや病院へ展開していく形ができてきたという点については、先ほどのアンケートにもあったように、定期的に評価して、なお待ち時間が減らない場合は、また別の方向や方法で課題解決して

いくと思うが、ネットワークとして確立した点だと思って評価している。

児童通所支援のサービスについても、ある程度アウトリーチという形を入れてもらったという点は、評価に値するが、実際は件数がほとんどない。件数がないというのは周知されていないのか、それともそのサービスを必要とされていないのかとなった時に、専門的機能の未来センター、あるいはいろんな専門職がいるかという、決してそうではないと思われるということになるが、そこはもうちょっと突き詰めて分析していただけたらよかったかなと思う。

【委員】

アウトリーチのところが気になっていたのも、あとで重点的に話すのが、利用者のいろんなニーズにしっかりと応えるというのが一番大事なところだと思うので、そこが進まないのが残念だと思っている。

【委員】

本来開催されるはずだったワーキングや審議会が抜けた状態で、議論がなかったから仕方がないが、多くの利用者からの意見にこれで答えられているのか。

【委員】

この運営審議会、結局何のためにやっているのかわからないまま終わるという感じ。こども未来センターに対する個人的なイメージは何も変わってない。個別にいろんなことをされているのはわかるが、全然入ってこないのはなぜか。運営審議会の進め方とか回数、時間も限られている中で結局何をしているのかという感じ。新しい委員が来られるとしたら、何を言われるのか。この会議で何かを言ってすごく大きく変わったとか、どういう風によくなったとか、ということがあるようにも思われたいし、意見を言っても、みたいな気持ちになってしまうような気がする。

【委員】

アンケートに協力してくださっている一般市民の人、先生たちが、最終的にこれだけを返した時に、どういう感想を持たれるかということで、かなり残念だし、未来センターが、一緒に積み重ねて進展している部分もあると思う。

教育相談で地域に出ているが、非常に期待感を持っているし、非常に素晴らしい支援をいただいているという声も聞いており、そういったことを含めて未来センターの全体像が見えてくるような返し方が必要ではないかと思う。

そういった意味では、医療部門が医師会レベルで研修を行うということも出てきたし、今取り組んでいること、これから取り組もうとしていることを具体的に示していくことが、未来センターを理解していただくこと、関心を向けていただくことにつながるのではないかな。

【会長】

運営審議会自体が、年に2回ぐらいしか開催されないということもあって、年度をまたぐと委員や担当者が変わったりして、これまでの議論が十分に重ねられていない感じがする。

運営審議会として、こども未来センターの今後の中長期的な在り方をどういう方向に舵を切っていくかという提言にすべきだが、今回の事務局の提言案は、アンケートの結果をこども未来センターの部門ごとに取りまとめたものであり、未来センター全体が総力結集して、どういう方向に進んでいくのかということが見えにくい。それぞれの部門で人員を増やすとか、理解していただくように周知するというような内容になっており、今後の方向性という意味で提言になっていないと思うので、これから議論を詰めていきたい。

まず1点目はアウトリーチ、もう1点は利用者の声。市民の声を見ると、こども未来センターのフル装備の支援を受けられた方は、非常に満足されていると思うが、支援に対して、以前よりもニーズが増えてくると、回数が減る、遠方のために利用できない、などそういう意見がたくさんある。

要するに、現在の仕組みでは多少増員したとしても回りきらないということなので、やはり委員の先生方にもご指摘いただいたように、こども未来センター一局集中ではなく、すでに医療の方で地域の機関との連携の仕組みができてきているような仕組み作りをしていく必要があるのではないかと思うが、そういう仕組み作りという点で、ご意見をいただきたい。それから、この提言を誰に対してどう返すかという確認をしたいと思っている。地域とのネットワーク、仕組み作りという点で、ご意見いただきたいと思うが、いかがか。

【委員】

1つには、児童の通所支援や、保育所、学校、幼稚園に対するアウトリーチは、支援する機関が入ってコンサルテーションして質を高めていくという機能で、要望があったから行くというよりは、対等な立場で、みんなで専門性上げましょうということをやっていくのと、児童については、児童のデイサービスがもついろいろな機能を把握して使い分けていく、そのためにはそのあたりを知っておくという頭がいるのかなと思う。

あともう1個は、相談について。例えば、診療にいかなくても、一般相談を窓口とするなど、早く有効的に動けるような相談支援をどうするかということ。以前から言っているが、計画作成を契約しようにも配置している職員が手一杯で、なかなか増やせない。

障害児のサービスを使う時には、プランを作って、そのプランに基づいて行政が支給決定する、という流れがあるが、実際は相談員の数が足りていないので、保護者がセルフプランを書いている。保護者の考えで作成されたプランなので専門性が足りていないという課題があり、一般相談を強化してどう拾っていくかということが大事だと思う。

具体的に言うと、指定特定は段階的にやめていって、一般相談、今までやってきた基本相談を誰でも受けられるようにし、その中で一緒にセルフプランを書くなどの形にして、広く早い段階で行き渡るようにする。

この時期、発達課題は、どの年齢に何をするか、タイムリーに急いでやらなければ、良い発達ができな

なくなってしまう。早期療育というのが一番大事なので、そういう意味では、この相談機能を充実させないと難しいのではないかと。

【委員】

アウトリーチに来ていただいた時に、支援の仕方をアドバイスいただいて、それを全員に徹底すると、子供の成長が違っているということを実感する。そういう機会を使って、私たちが専門的な勉強をさせていただきたいと思っている。全体的に支援する人が足りないとしたら、子どもに直接関わっている私たち保育者や教員は、保護者よりは専門性があると思うので、研修させていただくことで最初の支援を担うことができる。そういう意味で私たちを使っていただけたらと思う。

【委員】

こども未来センターの現状からなかなか増員できないというのが見えてきている。特に医療の部分で言えば、センター以外を強化することで改善につながったという取り組みをされている。実際、今回のアンケートにあったAチームとBチームという仕組みの中で、それぞれの医療機関で、特にBチームの機能を十分に生かし切れていないということであれば、研修や人材養成といったことがこども未来センターに期待されている。現場で接している専門職や学童の指導員も支援の必要な子供が増えていく中で、本当にこれでいいのかと悩みながら活動している。こども未来センターの役割を変えていくのであれば、現在こども未来センターで実施している研修などのいろんな活動の趣旨も見直していった方がいいという感じがする。

【委員】

私は保育アドバイザーという立場で園におり、支援の必要な子に関わっている。アウトリーチに来てくださった時は、残念ながら直接話を聞くことはできなかったが、他の人から聞いたことを実践すると、格段に違った。

アウトリーチの担当の方に、園の職員に対する研修の機会はないのか聞いたが、そういう機会、仕組みはないということだった。

しかし、そういう研修や仕組みができれば、ずいぶん増員できると思う。支援が必要なのかそうでないのかの判断は難しく、悩みながらやっているが、専門の方に教えていただく方が確実に早いということを実感している。

【委員】

もう1つ突っ込んで言えば、地域の人材の育成となった時に、How Toレベルではなく、基本的な研修という話が出たが、基本的な障害特性とかの勉強をした上で、実際の場面で助言を受ける。それで、基本がずれていたら、その基本をまた確認しなおして、また助言する。これを繰り返していくと、その人が、別の人に助言できるようになる。そこまで突っ込んでやることによって、地域で質の高い支援者が増

えていく。

これを例えば3年ぐらいかけてやると、未来センターに頼まなくても、この地域にはこういうところがあるから、ここにお願ひしようという流れができる。

さらに、未来センターがそういう人を集めて継続的に事例検討会とかをやって、質を維持していくということをするれば、どんどん広がっていくと思う。

【会長】

何のために市民の方、利用者の方、支援機関の方にアンケートをとったのかという原点に戻ると、未来センターという組織や人材を有効活用するためには、どんな絵を描いていけばいいのか、という提言だと思う。

地域の幼稚園、保育所等で、直接保護者や子どもに対応されている方に、コンサルテーションや集中的な研修があれば、地域の支援力が育成されるので、こども未来センターに殺到しなくてもよくなる。

時代とともにニーズが増えてきて、今までの事業をそのまま進めていって人が足りないという話ではなく、事業のあり方を考えていかなければいけない。

事業の仕分けをするために、アンケートでこども未来センターの外からの声を拾って、今後、こども未来センターのどこを強化していけばいいのか、どのように地域の人材育成をして、地域の支援力を高めていけばいいのかという意見は、出ていたと思う。なので、今回のアンケートの結果は、事業を整理する上でも根拠になる材料だと思う。

一次の支援機関に対し、こども未来センターは、今まで二次だったのが、おそらく、三次機能みたいなことになってきているのではないかと思う。一次とか、二次とか、三次というピラミッドみたいなイメージ。医療の方では、Aチームが専門的な発達障害の治療を行うところで、Bチームは発達障害の相談にも対応可能な一般小児科なので、一次がBチームとすれば、二次がAチームで、こども未来センターの診療所が三次機能という位置づけで描かれていると思う。

今日出されたアンケートによると、こども未来センターの診療所の初診申込者に、Aチームから未就学と就学児と両方あわせて42名紹介されてきているというのが、待機が減らない理由だと思う。それはなぜかという、診断や診療をしても、Aチーム、Bチームの一般の医療機関では継続したサポートにつながらないからだと思う。せっかくAチームで診断なりしてもらっても、結局、学校連携が必要だからこども未来センターに行ってください、継続してサポートができないので、ST、OTの専門のサポートを受けるのであればこども未来センターに行ってください、と逆に紹介されてくる感じなので、専門的な発達支援をするところをもっと計画的に作っていかないといけない。

厚労省の児童発達支援センターの在り方検討委員会で、児童発達支援センターの今後の在り方として、今までこども未来センターが担ってきたような、地域に対するコンサルテーションであるとか、専門的な研修をするとか、ということが求められている機能なので、西宮市にある児童発達支援センターが、こども未来センターとともに、そういう機能を発揮するような方向で合意がなされているのか。ただ、厚労省のこういう在り方を受けて、西宮市として、どのような仕組み作りをしようとしているのかとか、といったことも、非常に重要になってくると思う。

私は以前他府県で診断待ち6年というところの診断・支援体制の構築に関わったことがあるが、なぜそうなっていたかという、地域の診療機関で診断を受けても、専門的なサポートを受けられないので、結局は、診断からその後の療育まで対応できる医療機関に診断を求めて来てしまうということがあった。しかし、専門療育のできるセンターを支援体制整備の計画の中で開設していくことで、一極に集中することがなくなり、診断待機状態が緩和された。この事例のように、診療システムの構築と同時に発達支援の仕組みを作っていく、さらにその発達支援の仕組みの中には、専門的な療育センターで専門的な療育をするということも1つだし、専門性を有したコンサルテーションを行うための人員、人材育成の研修であるとか、そういうことも必要になってくると思うので、今までいろんなアウトリーチができてしまっているが、アウトリーチ自体をどこに対して、どういう目的で行くものかということを整理しないといけないと思う。

なので、こども未来センターと地域をつなぐ二次機能を計画的に作っていくということが必要ではないかと思う。

【委員】

今のみなさんのお話を事務局がどういう風にアンケートの集計結果として提言に載せていくかということを経済的にまとめていかなければいけないので、どこかでこういう文言を、こういう観点でという整理をしていく必要があるのではないかと感じている。

【会長】

本来であれば、今日の運営審議会の前にワーキングが開かれて、提言案についてとりまとめをするはずだったが、今日提案されている提言案では、どの委員の皆様もこれでは運営審議会からの提言とは言えないということなので、この場でどのように提言案をまとめるかということろまでは詰めることができない。

今期の委員は7月で任期が終わるが、次期委員に引き継いで、もう一度ワーキングを開催して、提言案を練り直して、審議会にかけるという作業をしなければならないという方向性で、本日の話し合いをもっていきたいと思っている。このことについて、この場で具体的に確認とか、整理しておいた方がいいということがあれば、教えていただきたい。

【委員】

教育現場の方はあらゆるネットワークが浸透してきているが、未来センター内の連携が切れているのではないかと感じる。未来センターはいち早く子どもたちの困り感に対応しなければいけないところにあると思うが、アウトリーチと言われるものに関しても、具体的に子どもさんに関わって、先生たちもそのアドバイスに従っているような取り組みを展開している中で、どういう風に返していくかという視点が、提言の中に盛り込まれていければいいと考えている。

【委員】

事務局でアンケートを実施するにあたって論議をされたと思う。

センターをこうしていくということや、アンケートが効果的だったから何年にとか、内部連携の仕組みとしてこういうことを強化して定着させていこうとか、本当に大変な思いをされたものも、よかったことも、提言の中に入れられた方がいいような気がする。アンケートの整理の中で、これを1回ぐらいはやっている、自分たちが経験的に身につけていく、または具体的に部署間でやったものとして位置づけられているのであれば何年にそういうことをやりましょうとか、やったことを積極的に位置づけをして提言の中に盛り込むというのも1つの方法ではないか。

【会長】

今回の大規模なアンケートについて、今後、こういう見直しは1回したら終わりということではなく、何らかの形で、外部評価、内部評価の仕組みを作っていくということか。そういうことも盛り込んだらというご意見でいいか。

【委員】

ここで議論した内容がどう伝わって、どう受け止められているのかが見えてこない。アンケートをとるために苦勞された人たちは、これを見てどう思ったのか、私たちはいろいろ頑張ってやったのにこの提言なのかというようなことがあるのではないか。

【事務局】

学校園所に出向いていくことをアウトリーチといっているが、学校側から見れば、音楽の演奏のように、誰かが来てくれることがアウトリーチという認識。

どの職種の方が、どういうタイミングでというのがわかりにくいとみなさんが言っておられると思う。担当校制の心理職がいて、相談があれば日程を調整して出向いていく、研修も実施する、ということ定着させていったのが始まりだと聞いている。その後、子どもが来ている時に見てほしい、という意見が出てきたり、担当校制という縛りではなく行ける者が行くといった機動性を持たせる方向に変えていった時期があったり、マイナーチェンジをしていった結果、わかりにくくなっている部分があると思われる。

この提言の中で、アウトリーチについて校長、園長、保育所長、私立の先生方にわかりやすく伝える旨、整理をしたが、少し弱い文面になってしまったと思う。研修会のニーズについても、先生方が集まれる夏に開催した時期もある。けれども、子どもを実際に見てほしい、走っている場面などで支援の仕方を教えてほしいという要望に応えるなど、タイムリーな方向にしているのが現状である。

委員の皆さんが言っておられるように、仕組み作りや啓発方法などを整頓して、管理職の方にわかりやすく伝えていくことが私たちのミッションであると認識している。

【会長】

アウトリーチについて、校長先生や管理職にきちんと説明していくという問題ではないという議論だったと思うが。

【事務局】

こちらがマイナーチェンジをしていくなかでズレが起こっており、センター的機能で何ができるか、市内のたくさん子どもたちをどのようにサポートするかという仕組みを作るということで、再度整頓することが必要であるということがわかった。

【事務局】

このように、未来センターが大所帯になり、絶えず人員が変わっているという状況がある一方で、専門職はずっと同じところというような陣容になっている。

事業ごとになっていて全体像が見えてこないという意見については、その通りだと思う。このようなアンケートをとって、担当している部署それぞれが応えるというスタイルをとったので、このような形になったと反省している。

最初、未来センターが設立された時に、教育、福祉、医療、今は保健も含めて一体となっていくための作業の中で、総力を挙げていたという気がする。各部署がバックボーンの違う中で、どのように一体化していくかという時期を経て、それなりに人員を確保でき、それぞれの部署が回り出した。改めて振り返って、もう一度、総力を挙げてということをしていく時期なのかなと実感している。

それぞれが利用者対応というところに注力してネーミング化した提言になっているが、人材育成という点では研修も結構実施しているし、実習生の受け入れも公立の機関として、医療・福祉・教育それぞれで取り組んでいるところ。実習生の感想を聞いてみると、未来センターに来てみて、いろんな機能があるのもわかったし、職員が連携をすごく大事にしているのがわかったという意見がたくさん出ている。なので、職員の意識としては、地域との連携を大事にしているということを改めて言わなくても、という風なところになってしまっていることも、反省の1つだと思う。全体として、大事にしている、今やっていることをどう伝えていくかということも、今一度見直ししながら、まとめ直しが求められているということがよくわかった。

【委員】

もっとシンプルに言うと、職員として経験してきた内容やノウハウを、もっと突っ込んだ形で意見を出して、新しいものを作っていくという話。今、アウトリーチの中にいろんなものが含まれてしまっているので、それを分けて、地域の拠点育成、例えば、地域の保育園と幼稚園、児発みたいところを重点的に育てる、1年2年したらその地区を任せる、というものと現在実施しているアウトリーチを分けてやった方が、わかりやすいと思う。全体がくるまれているところのわかりにくさをもう少し整理して機能を細分化し、どこに力を入れていくのかを明確にする。ある程度数年はしんどいかもしれないが、その後、楽になると思う。そういった深い議論を次期の運営審議会で行っていただきたいと思う。

【委員】

アンケートの後、職員の話し合いを随分されたと思う。現場ではもっとこうしたいというのが、きっと

あると思うので、そこがうまく回るようになればいいと感じている。

アウトリーチは1人のこどもに1回だけという縛りがある。このアドバイスを受けて成長した、やってみた結果をもう一度観てもらって、次の段階はこれでいきましょうというようなアドバイスがあると、さらに良いとは思っている。

支援を必要としている子はたくさんおり、私たちも専門性を高めることの重要性を感じている。だから、専門家に任せるところまでいかないものは、私たち自身がということろで、そういう意味の研修をしっかりと考えていただけたらと思う。

【委員】

人員が足りていないということなので、医療の関係で、Aチーム、Bチームという取り組みをされているような形で、何か地域の方たちと、うまく連携がとれるようなことが、本当に必要だと思う。未来センターのような機能を持つところがもう1つでもできたらというのが、なかなか実現できないのであれば、やはり、機能を分散するという形が必要だと思う。

【委員】

こども未来センターの機能について、一次、二次、三次といった枠割分担をした方がいいのかという議論だと思う。

医療の関係から見たら、うまい整理だと思う。診断に関してはBとA班があるが、どうしてもAから一定数が来る。その問題が診断と支援との関係の中で生じている中で、こども未来センターは三次機関だと仮説を立てた時に、何を強化して、何を優先するとか、逆に何を分散するとか、長期的な視点、考え方で、何を試行するのかがあった上で、現状がこうだから今年度の改善点はこう、という風に、よくあるような計画書のようなものを少し工夫された方がいいと感じた。

【会長】

仕組み作りやこども未来センターの位置づけについてはこの運営審議会の範囲を超えることであり、障害福祉計画で位置づけられていく部分だとは思っているが、現状出ている西宮市の障害福祉計画を見ると、何年も同じ文言が繋がっていて、そもそもこども未来センターが5年を経過した時点で、上位の意思決定機関とか政策決定のところで、そういう議論をもっとされないといけないと思う。

従来のもをそのまま継続していくということではなくて、体制整備のようなものが上位会議であるべき。この運営審議会の委員が、ここで議論したことを提言として挙げて、それがどうなるのか、挙げた提言通りにならないにしても、政策に結びつけるような形になっていくのかということろが見えにくいということもある。

こども未来センターの運営審議会として、外部の委員が入っているというのは、内部の視点と外部の視点の両方を合わせて何ができるかということろ。こども未来センターの人材を最大限に活かしていくために、今まで行ってきたアウトリーチについて、厚労省の児童発達支援センターの在り方検討委員会で、地域の事業所へのスーパーヴィジョン、コンサルテーション機能を強化していくということが打ち出さ

れているので、スーパーヴィジョンの機能やコンサルテーションの機能の整理をしていくということが必要だと思う

どこまで具体的な提案をこの場でしたらいいのかかわからないが、例えば、学校や保育所の先生、親御さんがこのアウトリーチを利用したいと思った時に、窓口がすごくわかりにくいところがあるので、窓口を一本化して申し込みの内容によって振り分けるというやり方もあるし、あるいは、アウトリーチ事業自体を療育の拠点を育成するためなど、もっと目的を明確にして、外に打ち出すということも必要ではないかと思う。

今までいろんな歴史で動いてきているものを全部ひっくるめてアウトリーチ事業と呼んでいて、毎年の事業報告は事業ごとに出てくるが、目的とかが見えにくいし、行ったことで地域の人材の育成につながったのか、地域が育ってきてこども未来センターが派遣しなくてもこの問題だったらあの保育所、幼稚園、事業所内で解決できる、というようなことが増えているのかということも検証していく必要があると思う。

【委員】

保育所等訪問事業があまり使われていないという意見があって、一般的なアウトリーチと何が違うのか。保育所等訪問は児童や保護者が契約する、アウトリーチは事業所や施設に行く、という関係性で分かれていると思うが、わかりにくい。周知で済む話かという、そもそも未来センターが保育所等訪問支援をする必要があるのか。おそらく、国がやれと言っているからやっていると思うが、アウトリーチでまかなえていけばいいのではないか。

もう1点は、未来センターは医療、福祉、教育の連携でやっているが、入口から出口までであるから、結局、医療モデルから社会モデルにいて、最後は地域で、といったモデルでやるとなると、先ほどの医療機関のA、Bの話も、医療モデルから社会モデルにいくプロセスに未来センターが入っている。

そのプロセスの中で、この地域ではこういう医療機関があって、こういう人だったらここがいい、というモデルを作ってしまうと、そこに行けば未来センターみたいなことができる、いわゆる、入口から出口までの機能をそれぞれの医療機関に持たせるということによって解決するのではないか。

【会長】

仕組み作りやアウトリーチ事業の在り方の整理について、いろいろご意見があった。本日の会議で出していた意見を今後どのように取りまとめて、次期の運営審議会の委員に引き継いでいくかということについて、事務局から考えを聞かせてほしい。

【事務局】

私どもが用意した提言案は不十分な内容で、本日、厳しいご意見をいただいた。本日提言をまとめるということだったが、今日いただいた意見を整理した上で、次回のメンバーに改めてこれまでの経緯等を説明した上で、改めてワーキングのメンバーを構成し、そこで今年度中に提言案をまとめていきたい。

今回は秋頃に開催を予定していたが、少し早めた方がいいと感じており、今後また調整させていただき

たい。

【委員】

次回のワーキングについては、どう考えているのか。

【事務局】

新たな審議会のメンバーでワーキングを構成して、たたき台を基に議論を交わしながらまとめていきたい。

【委員】

アンケートにもあったが、こども未来センターの知名度の問題について、発達障害という視点からちょっと離れて、市民に開かれたこども未来センターという意味で、夏祭りをやってはどうか。何でもいいから、ここにこども未来センターがあるということをまず気づいてもらって、地域の方を巻き込んで何かをやるということを考えてもらえれば。

【委員】

アウトリーチに来ていただいた時に、対象の子の他に、あの子大丈夫ですかというようなことを言われることもあるが、そのような子供を相談までもっていけるようにすれば、発見にもなる。

あともう1つ。園が保育所等訪問支援事業を利用していることで、保護者が意識を持って今度手続する、などとおっしゃることもあり、未来センターの継続的な個別支援はすごく大事だと思うし、いろんな役割を担っていると思うので、なおさら外部委員の声も聞いていただくといいと思った。

辛口な意見が多くあったが、私たちは西宮市の子どもたちのために、そして、このこども未来センターが西宮市のシンボルとして、機能していくことを願っている。

【委員】

ある児童を見に行っただけでも横にいる子も、とか、地域の中に交わることによって気づきが生まれるという狙いのお祭りもいいかなと思う。

何らかの仕掛けをしないとなかなか動かないことがあると思うので、ヤングケアラーの問題などますますこれから広がっていく子どもの課題を考えた時に、アンテナを張れるようなシステムがもっと地域の中にあればよい。未来センターは俯瞰的に見る、現場の支援は、他を伸ばしてやってもらうような。未来センターが後ろに下がって、全体の研修機能とか、そういう地域の課題というのを築いていくようなシステムとかを考えていくところまで、ランク1個上に上がるような形で機能してもらいたいと思う。

【委員】

今回で委員を降りるということになっているが、今回の任期では、未来センターの事業評価を改めて集中的に議論できなかった。こども未来センターがこの周辺地域に有効な社会資源として何を果たすかという議論が、本来あってもいいはずが、なかなかできなかったと思う。

特に、災害時にどういう機能を発揮するのかとか、そのために周辺地域の方々とどう繋がっておくとか、全然議論にならなかったのも、そういうこともこども未来センターの機能だと思うので、次の任期では議論していただきたいと思う。

【委員】

困り感のある子どもたちが、早期に、学級や集団の中で、本来の力を発揮できる、自己実現できる、そういった教育環境が、これから増えていくことを願っている。

【会長】

昨年度から引き続いて、こども未来センターの今後の在り方を検討するためにアンケートを実施したということで、そこから見えてくるものの整理について、こども未来センターの部署ごとに提言を作っていたと思うが、そもそもアンケートを作成する時にいろいろ議論されていたと思うので、今回の3種類のアンケート結果を踏まえて、こども未来センターとして内部の方々が今後の方向性をどう考えられるのかという議論をしていただいて、次回のワーキングの場にはこども未来センターの内部の職員の声も拾った上で、参加してほしい。

関係機関向けアンケートの回答率にも、連携の在り方が反映しているかもしれない。市立の小中学校は7割回答しているが、児童発達支援放課後等デイサービスの回答率が10%で、まとめにもそのことが課題だと書かれていて、なぜ少なかったのかという辺りも、今までの連携が教育の方が先行して進んでいたこともあるかもしれない。

せっかくとっていただいたアンケートについて、全体として議論をしていただければありがたいと思う。

【事務局】

本来であれば、この運営審議会を4回開催して提言をまとめるということから、もう1回このような議論を受けて、ワーキングを経てまとめるということができていれば、十分な内容となったかと思うが、それができなかった。

引き続き委員をお願いする方を含めた、新しい委員による次回審議会については、改めて開催の予定の連絡をする。

【会長】

これで、令和4年度第1回西宮市立こども未来センター運営審議会を閉会します。